

二〇一四年度ソワニエ看護専門学校一般入試(二次) 試験問題

受験番号

(解答は、全て解答用紙へ記入しなさい。特に指示のない限り、答えの末尾に「」は不要。同じ選択肢を二度使う設問はない。)

I 次の故事成語に関連のある語句を後の語群より選んで符号で答えなさい。

- ① 螭螂の斧とろうろうのおの ② 四面楚歌 ③ 漁夫の利 ④ 他山の石 ⑤ 漱石枕流そうせきちんりゅう

《語群》

イ 人の振り見て我が振り直せ ロ 横取り ハ 負け惜しみ ニ はかない抵抗 ホ 孤立無援

II 次の空欄に自然や天候に関する漢字一字を入れて、慣用句を完成させなさい。

- イ 遣らずやの () ロ () 行きが怪しい ハ () 千山千 ニ コップの中の () ホ () を投じる
へ () 上の楼閣 ト () の配剤 チ () に油をそそぐ リ () 魚の交わり 又 他人の () 似

III 次の文を読んで、後の問に答えなさい。

塵ちりに埋もれた暗い場所から、ここに一つの新しい美の世界がテンカイせられた。それは誰も知る世界であり乍ら、誰も見なかつた世界である。私は雑器ざしきの美に就いて語らねばならない。又その美から何を学び得るかを語ろうとするのである。

毎日触れる器具であるから、それは実際に堪えねばならない。弱きもの華やかなもの、込み入りしもの、それ等の性質はここに許されていない。分厚なもの、頑丈がんじょうなもの、健全なもの、それが日常の生活に即する器である。手荒き取扱いや烈しい暑さや寒さや、それ等のことを悦んで忍ぶほどのものでなければならぬ。病弱ではならない。華美ではならない。強く正しき質を有たねばならぬ。それは誰にでも、又如何なる風にも使われる準備をせねばならぬ。装うてはいられない。偽ることは許されない。いつも試練しれんを受けるからである。正直の徳を守らぬものは、よき器となることが出来ぬ。工芸は雑器に於て凡ての仮面かめんを脱ぐのである。それは用の世界である。実際を離れる場合はない。どこまでも人々に奉仕しようとして作られた器である。併し実用のものであるからと云つて、それを物的なものとのみ思うなら誤りである。物ではあるうが心が誰が云い得よう。忍耐とか健全とか誠実とか、それ等の徳は既に器の有つ心ではないか。それはどこまでも地の生活に交わる器である。併し正しく地に活きる者に、天は祝福を降すであろう。よき用とよき美とは、叛く世界ではない。物心一如であると云い得ないであろうか。

彼等は勤め働く身であるから、貧しく着、慎ましく暮している。併しそこには満足が見える。彼等はいつとも健やかに朝な夕なを迎えるではないか。カ
エリみられない個所で、無造作に扱われ乍ら、尚も無心に素朴に暮してゐる。動じない美があるではないか。僅かの接触で戦くほどの繊細さにも、

心を誘う美しさがある。併し強きダゲキに、尙も動ぜぬ姿には、それにも増して驚くべき美しさが見える。而もその美しさは日毎に加わるではないか。用いずば器は美しくならない。器は用いられて美しく、美しくなるが故に人は更にそれを用いる。人と器と、そこには主従の契りがある。器は仕えることによつて美を増し、主は使うことによつて愛を増すのである。

人はそれ等のものなくして毎日を過ごすことが出来ぬ。器具とはいうも日々の伴侶である。私達の生活を補佐する忠実な友達である。誰もそれ等に頼りつつ一日を送る。その姿には誠実な美があるではないか。ケンジヨウの徳が現れているではないか。凡てが病弱に流れがちな今日、彼等のうちに健康の美を見ることは、恵みであり悦びである。(雑器の美 柳宗悦)

問1 傍線部①～⑩のカタカナは漢字に、漢字は平仮名にそれぞれ直しなさい。

問2 波線部「イ」の「即する」の本文での意味を、次の中から選んで符号で答えなさい。

- イ 即する
- a ぴったり合う
 - b すぐ役立つ
 - c 欠かすことのできない

問3 波線部「ロ」の「忍ぶ」と「ハ」の「仕える」という言葉は意味がやや分かりにくい。これは「要するに、どうすること」なのか。本文中の語句を使って(そのままが使える時はそのまま、そのままが使えない時は言い切りの形「終止形」で示して)、その説明としなさい。

問4 傍線部「A」の「ここ」の指示内容を、できるだけ短い形(六字以上は採点対象外)で記しなさい。

問5 傍線部「B」の「仮面」とは何か。本文六行目までに使われている動詞二語を連用形名詞(「て」の付く形)にして、「AとB(例 安らぎとためらい)」の形で答えなさい。

問6 傍線部「C」の「実際」とはどういうことか。具体的な説明になっていると思われる部分を一五字以内で抜き出しなさい。

問7 傍線部「D」の「心」とはどういうものか。可能な限り文中の語句を使って、十五字以内で答えなさい。

IV 次の文を読んで、後の問に答えなさい。

河口局から郵便物を受け取り、またバスにゆられて峠の茶屋に引返す途中、私のすぐとなりには、濃い茶色の被布ひふを着た青白い端正の顔の、六十歳くらい、私の母とよく似た老婆が「あゝ坐まつていて、女車掌が、思い出したように、みなさん、きょうは富士がよく見えますね、と説明ともつかず、また自分ひとりの詠嘆ともつかぬ言葉を、突然言い出して、リュックサックしよった若いサラリーマンや、大きい日本髪ゆつて、口もとを大事にハンケチでおおいかくし、絹物まとつた芸者風の女など、からだをねじ曲げ、一せいに車窓から首を出して、いまさらのごとく、その変哲Aもない三角の山を眺めては、やあ、とか、まあ、とか間抜けた嘆声を発して、車内はひとしきり、ざわめいた。けれども、私のとなりの御隠居は、胸に深い憂悶①でもあるのか、他のユウラン客とちがつて、富士には一瞥②も与えず、かえつて富士と反対側の、山路に沿つた断崖を「いゝ見③つめて、私にはその様Bが、からだがいびれるほど快く感ぜられ、私もまた、富士なんか、あんな俗な山、見たくもないという、高尚な虚無の心を、その老婆に見せてやりたく思つて、あなたのお苦しみ、わびしさ、みなよくわかる、と頼まれもせぬのに、共鳴の素振りを見せてあげたく、老婆に甘えかかるように、そつとすり寄つて、老婆とおなじ姿勢で、ぼんやり崖の方を、眺めてやつた。

老婆も何かしら、私に安心していたところがあつたのだらう、ぼんやりひとこと、

「おや、月見草。」

そう言つて、細い指でもつて、路傍④の一箇所をゆびさした。「うゝゝ、バスは過ぎてゆき、私の目には、いま、ゝゝゝひとめ見た黄金色の月見草の花ひとつ、花弁もあざやかに消えず残つた。

三七八米の富士の山と、立派に相對峙あたいじし、みじんもゆるがず、なんと言うのか、金剛力草とでも言いたいくらい、けなげにすつくと立つていたあの月見草は、よかつた。富士には、月見草がよく似合う。(富嶽百景 太宰治)

問1 傍線部①～④のカタカナは漢字に、漢字は平仮名にそれぞれ直しなさい。

問2 ≪ ≫部「あくえ」に入れるにふさわしい語を次より選び、符号で答えなさい。

a ちらと b じつと c さつと d しゃんと

問3 傍線部「A」では、「富士山」を「変哲もない三角の山」と表現しているが、これと同じ方向で富士山を捉えて表現している部分を五字以内で、また、それとは対称的な方向で富士山を捉えて表現している部分を十字以内でそれぞれ抜き出しなさい。

問4 傍線部「B」の「からだがいびれるほど快く感ぜられた」のは老婆の様子に「私」が何を感じたからか。十字以内で抜き出して示しなさい。

問5 富士山を前にし、「私」が「私に近い存在」と感じているものを、本文からすべて単語で抜き出しなさい。

問6 傍線部「C」の「あの月見草」とは「どんな月見草」のことか、分かり易く説明しなさい。

V 次の文を読んで、後の問に答えなさい。

仁和寺にある法師、年寄るまで、石清水を拝まざりければ、心うく覚えて、ある時思ひ立ちて、ただひとり、徒歩よりまうでけり。極楽寺・高良などを拝みて、かばかりと心得て帰りにけり。さて、かたへの人にあひて、「年頃思ひつること、果し侍りぬ。聞きしにも過ぎて、尊くこそおはしけれ。そも参りたる人ごとに山へ登りしは、何事かありけん。ゆかしかりしかど、神へ参るこそ本意なれと思ひて、山までは見ず」とぞ言ひける。すこしのことにも、先達はあらまほしき事なり。(徒然草 第五十二段 吉田兼好)

問1 傍線部①②の読みを現代仮名遣いで記しなさい。

問2 傍線部「イ」を、前後の文脈に合わせて現代語訳しなさい。

問3 本文中には何箇所か係り結びが使われている。その数を書きなさい。

VI 次の文を読んで、後の問に答えなさい。

子曰、君子不_レ重_レ 則_レ不_レ威_レ 學_レ則_レ不_レ固_レ 主_レ忠_レ信_レ 無_レ友_レ不_レ如_レ己_レ者_レ、

過_レ則_レ勿_レ憚_レ改_レ。

問1 二重傍線部を書き下し文にすると「己に如かざる者を友とする無かれ」となるが、この読みになるよう「無友不如己者」に返り点と送り仮名を施し、さらに現代語訳しなさい。

問2 部を書き下し文にし、さらに現代語訳しなさい。

問3 次の空欄を適語で埋めて、本文に関する解説文を完成しなさい。

本文は「子曰く」で始まる《あ》の「学而第一」の一部である。「子」とは、先生のことであるが、ここでは言うまでもなく、《い》のことを指す。

《い》や孟子等の説いたことは「《う》《学(教)》と呼ばれ、中国の文化、国家、さらに周辺諸国にも大きな影響を与え、現在も与え続けている。日本には西暦千二百年頃伝来したと考えられているが、明確ではない。江戸幕府は、宗代に朱熹が体系化した《え》《学》としてこれを取り入れ、武家政治の基本理念とした。明治になってからも、その影響は続き、《お》《勅語》にもそれが色濃く反映されている。